


<p>団体名</p>	<p>NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ</p>	<p>活動タイトル</p>	<p>子ども食堂での「気になる子」への対応状況調査</p>	
<p>望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p>■活動風景</p>	
<p>●望ましい社会状況（ビジョン）</p>	<p>当団体のビジョンは「子ども食堂の支援を通じて、誰も取りこぼさない社会をつくる」である。新型コロナウイルスの流行など様々な社会課題によって人々の不安は高まっている。その中で、安心してほっとできる、より多くの人々が支え合う、よりインクルーシブ（包摂的）な地域・社会づくりが課題となっているし、そのような安全地帯（居場所、セーフティネット）の構築が人々のチャレンジを促し、地域と社会の活性化と発展を可能にする。そのような居場所が至るところに存在する社会をめざしたい。</p>		<p>子ども食堂エピソードブック ある日の子ども食堂</p>	<p>「子ども食堂エピソードブック ある日の子ども食堂」を作成し、子ども食堂と「ちょっと気になる子との関わり」を言語化した。</p> 
<p>●団体の社会的役割（ミッション）</p>	<p>ビジョン達成のため、当団体は2つのミッションを掲げている。 個々の子ども食堂や地域単位のネットワーク団体に寄付を仲介や保健衛生環境の向上を支援することなどによって、「子ども食堂が全国のどこにでもあり、みんなが安心して行ける場所となるよう環境を整える」。 また、より多くの企業・団体の多様なコミット（運営参加、寄付、協賛等々）を促し、提案・協力・協働することなど「子ども食堂を通じて、多くの人たちが未来をつくる社会活動に参加できるようにする」。</p>			
<p>●団体の活動基盤</p>	<p>当団体の社会的役割を十分に果たすには、以下の活動基盤があることが理想的である。 ●人材：プロジェクトベースの組織運営のための自律的な仕事人であり、子ども食堂と企業という異質なセクターを架橋するためのマルチセクター人材。 ●資金：受益者負担でまかなえない領域における、全国を支援するための旅費、地域理解を促進する広報・啓発費、根拠となる調査研究費などの資金。 ●ナレッジ：子ども食堂の多様な運営状況、課題感、想いなどの情報。また、架橋していく先の企業等の社会貢献意識やCSRに際しての課題感などの情報。</p>			
<p>■活動報告</p>			<p>■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>	
<p>本事業では、経済的困難を初めとした様々な課題を抱えた「ちょっと気になる」子どもや家族との関わりについて、25の子ども食堂から70の事例をヒアリングし、その事例を基にした「子ども食堂エピソードブック ある日の子ども食堂」を作成・配布した。本冊子は子ども食堂の「気になる子」との関わりを言語化・可視化し、子ども食堂運営者が他の子ども食堂での取り組みを知ることで参考にしたり、子ども食堂の力を再認識するきっかけになった。 また中間セミナーにおいては、冊子に掲載されたエピソードは一部の特別な事例ではなく、どの子ども食堂でも起こっていることだと再認識するワークショップを開催した。 千葉県では、子ども食堂ネットワークと共催して子ども食堂でのエピソードを聞き、主に市内の子どもを支援する専門職にも子ども食堂について知って頂く機会をもった。また子ども食堂運営者と専門職がお互いに顔と名前を一致させる交流会も実施し、子ども食堂運営者と専門職のネットワーク形成のためのきっかけづくりを行った。</p>			<p>「子ども食堂エピソードブック」は、今まで暗黙に行われていた子ども食堂の「気になる子」との関わりを言語化・可視化し、子ども食堂運営者を中心に配布した。子ども食堂運営者自身もコロナ禍で活動に苦労されている中、改めて子ども食堂の意義を感じ、今後の活動継続のモチベーションになるものになった。 子ども食堂へのヒアリングや、オンラインセミナーでは、数多くの子ども食堂からエピソードを引き出すことができた。子ども食堂運営者自身にとっては「大したことはない」と思っていることでも、改めて他の運営者や関係者に共有することで、価値を再認識する機会となった。一方で、開催していない地域の子ども食堂でも様々なエピソードがあるはずであり、今後更なる機会が必要だと考えられる。 イベントや交流会を通じて、子ども食堂の価値を支援専門職に知って頂く機会となり、千葉県では子ども食堂運営者と専門職が顔を合わせる機会を作ることができた。一方でコロナ禍が続き活動が制限されているため、実際に「気になる子」に対応するためのネットワークを作って活動するには至っていない。</p>	
<p>■事業を通じて得られたノウハウ</p>			<p>■望ましい社会状況を達成するための課題</p>	
<p>「子ども食堂エピソードブック」を通じて、子ども食堂の「ちょっと気になる子」に対応する力を改めて認識することができた。全国約5,000箇所の子ども食堂では、こうした「気になる子」との関わりが日々行われており、その方法には様々なものがあることが分かった。 セミナーやイベントを通じて、子ども食堂のエピソードを引き出すノウハウが蓄積された。子ども食堂ならではの対応であっても、子ども食堂運営者にとっては「日々の当たり前」の出来事であり、改めて言語化する機会が少ない。こうしたイベントを通じて、ファシリテーターを通じて「当たり前」の出来事に焦点を当てて語っていただくことで、子ども食堂運営者に自信を持っていただき、他の参加者にも参考になるエピソードを引き出すことができる。また支援専門職など、子ども食堂の実態について詳しく知らない方々に、子ども食堂の価値を知っていただく機会ともなる。</p>			<p>子ども食堂の箇所数は全国5,000箇所となり、コロナ禍であっても箇所数は増加している。それだけ子ども食堂が子どもや家族にとって大きな支えになっていることの証左であると考えられる。一方で、子ども食堂がまだない地域や、子どもの数に対して足りていない地域もある。そうした地域でも子ども食堂が生まれてくるように、全国子ども食堂でのエピソードを蓄積することで、子ども食堂の価値をより普遍化して示す必要がある。 また、子ども食堂という言葉の認知度は高まっているが、その実態が詳しく知られていないと言えない。特に子どもの支援を行っている専門職に知られていないため、子ども食堂と連携して子どもを見守り支える地域づくりが必要である。 更に、子ども食堂がどこにでもある社会を実現するためには、一般の地域住民の理解や協力が不可欠である。子ども食堂の価値をより広く伝えられるツールも必要とされている。</p>	
<p>この1年間の活動を通じて</p>			<p>子ども食堂の「ちょっと気になる子」との関わりを言語化・可視化すること を達成しました。</p>	
<p>■受益者の具体的な変化（自由記入）</p>			<p>子ども食堂→「ちょっと気になる子」の関わり方を再認識し、より多様な対応方法を知った。 千葉市内の専門職→子ども食堂の取り組みを知り、連携の必要性を認識し、一部地域では実際に連携する方法を模索している。 子ども・家族→安心して子ども食堂に通える環境が整いつつある。</p>	